

5 東京近代水道の青写真

明治 21 (1888) 年 8 月、東京の各種都市施設を整備するため「東京市区改正委員会」が政府に設けられます。同委員会は、上水改良は現下の急務であるとして、内務省衛生局雇間技師バルトンを主任とする 7 名の設計委員による改良水道の調査設計に着手します。同年 12 月には第一報告書が作成されました。

ほぼ時を同じくして、民間による東京水道会社設立の動きがありました。横浜水道を設計した英国技師パーマーがこの設計に携わっており、設計案を内務省に提出します。

東京市区改正委員会は、バルトン等の設計案と、パーマーの設計案の比較検討をベルリン市水道部長ヘンリー・ギルに依頼し、さらに来日中のベルギーの水道会社技師長アドルフ・クロースにも意見を求めるなど幅広くかつ慎重に調査を進めました。

明治 23 (1890) 年 3 月、バルトン等設計委員は、それまでに示された諸見解を踏まえて第二次報告を作成します。

その概要は、玉川上水路により多摩川の水を千駄ヶ谷村の浄水工場に導き、沈殿・ろ過した後、麻布及び小石川の給水工場へ送水し、浄水工場に併設された給水工場を含めて 3 箇所の給水工場からポンプ圧送あるいは自然流下で市内に配水しようとするものでした。

明治 23 (1890) 年 7 月、この案は内閣総理大臣の認可を得、東京府知事により告示されますが、明治 24 (1891) 年 11 月に開設された東京市水道改良事務所の技師・中島鋭治によって再検討され、変更されます。

その内容は、浄水工場設置場所を淀橋町に、給水工場設置場所を本郷及び芝へと変更し、和田堀、淀橋間に新水路を築造するというものでした。

こうして東京近代水道創設の青写真は整い、あとは着工を待つのみとなりました。